平和研修リポート：私が見た被爆地

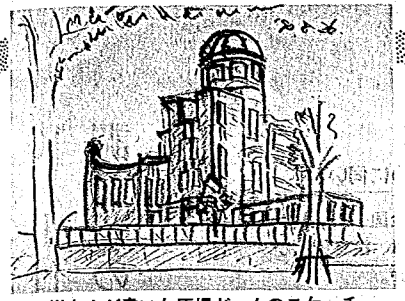
原爆を知ることから始まる核廃絶

＊――被爆地を訪ねたお二人の体験報告

イラクのクウェート侵攻に始まる中東情勢の緊張は、日に日にその度合いを強め、世界的な軍縮のうねりに水を差しています。平和の時代にどうして？　一歩間違えばという怖さが一瞬脳裏をかすめます。こうした中で、核兵器や細菌兵器が使われたらどうなるのでしょうか。日本は世界で唯一の被爆国ですが、私たちは、過去のあやまちを繰り返さないためにも、平和のあり方を強く心にとめ、再認識していかなければなりません。

市では、この非核平和意識の高揚を図るため、市民の方を原爆被爆地の広島、長崎に派遣しました。

今号では、この研修に参加された西川敦子さん（南町）と小熊香さん（秋葉一）、お二人のリポートをご紹介します。



西川さんが書いた原爆ドームのスケッチ

一九四五年からの叫喚

西川敦子（南町）

西川さん

剣の先に人間の頭を突き刺して得意顔で姿態を作る兵士。全裸で折り重なる骸の山。血と炎とで真紅に染まる長江。

私が、広島・長崎を訪ねた時、脳裏に浮かんだのは、中国南京虐殺記念館で目にしたこの光景である。同館は、現在も、館内通路の両側におびただしい数の人骨を配し、戦争の悲惨さやこの惨禍を二度と繰り返してはならないことを世界に訴え続けている。これは、広島・長崎の「原爆資料館」と同じ主旨である。よって、私が広島・長崎を訪れて抱いた感情は、この虐殺記念館で抱いたそれと非常に酷似している。「虐殺」「原爆」と手段こそ違うが、どのような方法であっても、失われた命はかけがえのないものであり、人類が人類の命を奪うということは最大級の犯罪である。手段ではなく、戦争そのもの

を憎むべきなのである。

鉄骨がむき出しのドーム。放射能を浴び、無傷のまま死にゆく兵士。頭髪が抜け落ち、末期の水を求めてさまよう少女たち。

彼ら、原爆犠牲者が求めているものは、憐憫（れんびん）ではない。彼らのような人々を生み出す戦争を二度と起こさないでくれという叫びである。戦争の爪跡や傷跡を目のあたりにしたまま、無責任な傍観者として通り過ぎていくのではなく、この悲劇の町を一歩踏み出す時に、平和を希求する意志を持ってくれということであると思う。

次に、今回特に心に残ったことについて述べてみたい。

一つは、平和公園内にある被爆した女教師が子どもを抱いて絶望的な悲しみにぬれて空を見上げている銅像「原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑」である。この石造台座には、原爆歌人正田篠枝さんの書いた「太き骨は先生ならむ　そのそばに　小さき頭の骨　あつまれり」の短歌が刻まれている。

私は、現在、小学校教諭であり、一年生を担任している。私は子どもたちに誰一人として、このような戦争の惨禍を味わわせたくないと強く思った。

この場所に、中山小学校一年生の手向けの言葉「みんなとなかよくします。いじわるをみたらとめます。」があったが、このように、日頃からの命に対する慈しみが大切であると思う。また、他人の痛みを自らのものとする思いやり、意に染まないこと・不条理なことを否定できる強さも、子どもたちにつけてやらねばと思う。

一人一人が、日々、自分以外のものに思いやりが持てるならば、きっと戦争など起こりはしないと思うので、私は、自分の中の小さな平和を子どもたちにこんなふうに広げたい。それが私の平和を希求する形であり、「ヒロシマ」・「ナガサキ」の叫喚に対する私の答えである。

もう一つは資料館にあったのであるが、爆心地近くで被爆した中学一年生の朝日俊明さん・三上直樹さんの最後の様子を知らせる表記である。彼らは、瀕死の状態で自宅まで戻り（他の学生は全滅）、被災状況を詳しく家人に語り亡くなったそうである。彼らの言葉や核の恐ろしさを、私たちは長く伝えていかなければならないと痛感させられた。この地をより多くの人々に訪れてもらいたいと思う。

「ヒロシマ」「ナガサキ」は、いつでもそこにある。これを考え、戦争を繰り返さない、核を廃絶しようという人々が増えるように、「非核平和都市」が数多く宣言されるように、核兵器がなくなったときに消灯されるという「平和の灯」（広島平和公園内）が一日も早く消されるように……祈る。

お買物、ご用命は市内で

お住まいの水まわり
見直して見ませんか
浴室　キッチン　トイレ……
水まわり増改築専門店
システムショップ かねみや
本町2　☎24-1630

トータル　ビューティサロン
渡辺美容院
本町3　能代川寄りの下通り通り
☎22 0626
婚礼・着付
エステ（美顔）
カバーマーク＆ウェラ
定休日／毎週火曜＆第3日曜日
◇営業時間前は電話予約制
フリーダイヤル 0120-23-0626
ヘアーステーション
わたなべ駅前店
本町通り　☎22 2611

非核平和都市宣言

私たちは　私たちの新津を
緑豊かなまちに
文化の香り高いまちに
そして　お年寄りと子供が大切にされる
あたたかいまちにしたいと願っています
この願いは
一瞬にして生きとし生けるものの生命を奪い
あらゆるものを破壊しつくす核兵器とは
決して共存できません
私たちは
平和を願うすべての国の人々と手をつなぎ
核兵器の完全廃絶を強く訴えます
美しい未来と平和を　子供たちに伝えることが
私たちの責務と確信するゆえに
私たちは　ここに平和への誓いを新たにし
非核平和都市を宣言します

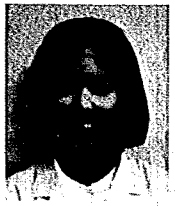
1985年9月

新津市

平和の母子像

毎年千二百人の命が消えてゆく…

小熊香（秋葉一）



小熊さん

『原爆』という二文字を耳にすると、「原爆は許せない、二度と被爆者をつくってはいけない」と、私は思う。しかし、「なぜ核に反対するのか、実際にどう行動するのか」と問われた時、私は答えられるだろうか。私は原爆について何を知っているのだろうか。

八月の終わりに訪れた長崎はまだ暑く、街は観光客であふれていたが、長崎平和公園を訪れる人は少なくせみの声だけが耳についた。

長崎では、大浦診療所のケースワーカーのお世話で、二人の被爆者に被爆体験を聞くことができた。

長崎に着くとすぐに内田保信夫妻を訪ねた。内田夫妻は、二人とも被爆者である。

内田夫人は、母としての四十五年間を涙ながらに語ってくれた。夫人は、五十日も早く生まれ高熱で泣くことさえもできない息子さんを見て、原爆に怒り、被爆した我が身を呪い気が狂いそうになった。息子さんが咳をするたびに、熱を出すたびに、原爆の影響ではないかと不安で胸がえぐられる思いだった。「私の原爆症に対する不安は死ぬまで続く」と、夫人は言う。

これから先、被爆者だけでなくその子孫までもが原爆を背負っていかなくてはならない。原爆は、人の体や心を傷つけるだけでなく、人の未来にまでも深い傷跡を残したのである。

被爆当時、中学生だった内田保信さんは、「私たちは被爆体験を語れる最後の年代ですから」と、体の不調をおして熱心に被爆体験を語ってくれた。

内田さんは、友人と一緒に被爆したが、友人は原爆投下の翌日に消えるように亡くなっている。内田さんは、死の恐怖に怯えながら、生きているのか死んでいるのかわからない人々の中で、熱傷にうじ虫がポロポロわいた体を何日も横たえていた。内田さんの言葉を借りれば、「原爆は人を生きながらに腐らせる」のである。

内田さんは、「私は家族を失っていないから」と、淡々と被爆体験を語ってくれたが、「原爆は犯罪である。原爆は私達の手で廃絶する。廃絶できると信じている」という言葉に、被爆者の原爆に対する怒りと核廃絶への信念を私は強く感じた。

次の日、「被爆者の店」で山田拓良さんにお会いした。山田さんは原爆で六人の家族を失っている。山田さんは、被爆当時、何が起きたのか、何故元気だった姉や弟が苦しみながら死んでいくのか、まったく訳がわからなかった。

原爆は、人として生きることだけでなく、人として死ぬことさえも許さなかったのである。

さらに、山田さんは被爆者の今の状況についても説明してくれた。原爆が投下されてから四十五年たち、被爆者の高齢化が進んでいる。長崎の被爆者六万九千人の平均年齢は六十一歳、病気にかかり易く治りにくい状態が進行し、年間千二百人の方が亡くなっている。また、原爆で家族を失い原爆孤老（ころう）となった人々、同居家族のいない被爆者の夫婦などが、身体的にも経済的にも生活することが困難な状況にある。

被爆者に人間らしい安らぎのときは、いったいいつ来るのだろうか。私は、長崎を訪れて、『原爆』は決して過去のことではなく、現在、そして未来のことなのであると強く感じた。高齢化した被爆者に人間らしい生活を国として保障する日が一日も早くきてほしい。

被爆者は、核廃絶を願い平和を祈り、勇気を持ってつらい被爆体験を語る。私達は、真実をみつめ、もっと積極的に原爆を知ろうとしなくてはならない。原爆の恐ろしさを、悲惨さを語りついでいかなくてはならない。それが核廃絶につながると、私は信じる。

お買物、ご用命は市内で

これなら安心
サービス特典付
4年以内の裏返し一部屋につき1枚無料
畳に保証書がつきました！
新津畳協同組合加盟店より畳をご購入頂きますと、アフターサービス、安心保証をお約束する、保証書を発行致します。
●但し新畳10,000円以上、表替6,000円以上の畳に限らせて頂きます。(税別)
お問い合わせは
新津畳協同組合
☎22-7923
又はお近くの畳店へどうぞ